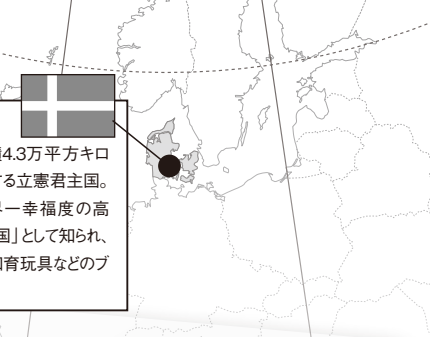




首脳級会合の会場ともなった、ベラセンター内プレナリーホール。会議中のペットボトルの使用を極力抑える観点から、会場内にはウォータークーラーが多く設置されていました。

デンマーク王国 DATA

人口551万人(≒北海道)、面積4.3万平方キロ(≒九州)、欧州最古の王室を有する立憲君主国。「国際競争力5位(WEF)」「世界一幸福度の高い国」「環境・デザイン・福祉先進国」として知られ、アンデルセン童話、食器・家具・知育玩具などのブランドは日本でも有名。



当会事務局職員が、2007年1月より在デンマーク日本大使館に出向しています。国際競争力や人々の幸福度で高い評価を受けるデンマークからの現地報告を不定期にお届けします。

COP15の現場から



樋口 麻紀子
在デンマーク日本大使館一等書記官
(経済同友会事務局より出向中)

12月18日、22時33分。この時刻をもって、今回のCOP15の最大にして一つのヤマ場が終了しました。鳩山総理一行を乗せた政府専用機が、当初予定時刻を2時間強超過してコペンハーゲン空港を出発したのです。本来、政府専用機のスケジュールが変更されるのは異例中の異例とのことですが、今回のCOP15はそれもやむなしと思えるほど異例尽くしの会議だったようです。

そもそも、COPという閣僚級の会合に各国首脳が集うこと自体が初めてのこと。一気に膨らんだ会議の規模により、UNFCCCの事務作業は混乱を来し、あるNGO参加者は、「4日連続で会場に通っても、まだ入場パスが手に入らない」とこぼしていました。

会議の進行も首脳会合の段階に入ってからでは想定外続きでした。首脳級日程初日の17日には、デンマーク女王陛下主催夕食会の後に、深夜から未明にかけて非公式首脳級会合が急きょ開催され、翌18日も当初予定を無視する形で非公式会合が続き、多くの事務方は先の展開が読めないまま推移を見守りました。思い思いの姿勢のまま疲れ切った表情をして向かい合う各国首脳の姿を、新聞等のスナップ写真で目にした方も多いことと思います。首脳自らが早朝から深夜まで顔を突き合わせ、何度も話し合うこのような会議は、今までに例がなかったのではないのでしょうか。

このような背景で成立したコペンハーゲン合意は、期待されていた「野心的で、法的拘束力ある枠組み」には及ばず、デンマークでも失望感を露わにした報道が相次ぎました。ただ、これほど異例の運営、究極的な政治主導の形をもってしても成果を出し得ないところに、気候変動をはじめとする地球規模課題の難しさと切実な重要さが表れているのではないかと感じます。

同時に、新米なりにロジの一端を担った立場としては、今後の国際会議・交渉に際して、政治的リーダーの

「プレゼンス」と、リーダーの外遊時の「機動性」が重要になってくるのではないかと感じていました。事務方の本音をいえば、首脳・閣僚の予定は流動的でないに越したことはありません。ごく小さな変更一つに、数十人単位の連絡・調整が伴い、場合によっては他国との二国間関係上の配慮までが必要になるからです。一方で、今回のように各国リーダーが顔を合わせ、共に打開の道を探ることの重要性が増すとしたら、当の主役が事前に決定された予定・シナリオ以外の選択肢や、その場の空気を感じながら判断する自由を持たないのでは、「外遊」の意義も制約されてしまうと思うのです。

国際的な場において日本のプレゼンスを高めるためには、従来の「政治的リーダーの外遊」のあり方を見直し、その効果と効率性をいかに高めるかという観点から、前例にとらわれることなく新たなモデルをつくっていく必要があるのかもしれない。

最後に一つ、今回発見した「デンマークらしさ」についてお話しします。コペンハーゲンという小さな都市でのCOP15開催にあたり、当初からホテル、交通等インフラ面でのキャパシティ不足が懸念されていました。このような中で、普段北欧を周遊している観光クルーズ船をコペンハーゲン港に停泊させ、それをホテルとして活用する秘策までもが飛び出しました。自由な発想で問題を逆手にとり、ビジネス・チャンスを生み出す姿勢に、さすが「商人たちの港」(コペンハーゲンという市名の由来)と脱帽した次第です。



会期中、ホテルとして使用された観光クルーズ船。350室・1200人規模の船室は決して広いとはいえませんが、各国ジャーナリスト、政府代表団、NGO参加者で満室だったとのこと。日本のロジ要員も一部ここで「合宿」生活を送りました。